

平成20年度史跡小牧山主郭地区第1次発掘調査概要

調査は、A～D区とした4か所について実施し、B区とC区で確認した石垣が一連のものであったことから、B区の北側と南側にある露頭石垣の図面作成もあわせて行った。各区の調査概要は次のとおりである。

A区

主郭（曲輪001）における建物の痕跡の有無を確認するために設定した調査区であるが、ここには小牧市歴史館やそれに伴ういくつかの施設が建っており、調査位置は限られた。

今回は曲輪内の北西部（歴史館北側）に調査区を設定したが、表土掘削を始めてまもなく、電線を埋設した溝が調査区を二分するように北東－南西方向にはしっていることがわかった。丁度その攪乱溝を境にして、調査区北西側では地表下1mで、南東側では同30cmで曲輪面を確認した。北西側の面は礫混じりの黒色土によってなり、所々固く締まり、南西側から北東側へ向かってゆるやかに下がっている。南東側では、この黒色土面上に黄色土を主体として、部分的に帯状に黒色土を含む土を積んで一段高い面が形成されている。こちらの面にはあまり締まりは認められない。いずれの面においても建物などの遺構は確認できなかった。

南東側が高く北西側が低い約70cmの段差がみられるが、高い部分の周囲には石積などの施設はみられなかった。主郭（曲輪001）法面に石垣が築かれていたことを考えると不釣り合いにもみえる。低い北西側が削られたことによって生じた段差であると考え、A区の法面下にあたるB区では、本来あったはずの石垣がかなり壊れた状況で確認されており、関連があるのかもしれない。

B区・C区

主郭法面下の、西側から北回りに東側へ続く細長い形状をした曲輪051の範囲、形状を確認するために設定した調査区である。B区、C区は主郭の北西側、西側にあたり、7mに渡って露頭している石垣を挟んだ北側と南側にあたる。

両区とも曲輪051の山側には石垣が確認され、それが切れることなく続いていることを確認した。石垣は、C区南端からN-31°-E方向に7.7mで隅角部に至り、134°東へ折れて露頭石垣まで7.8m延び、C区と露頭石垣との境部分で29°北に折れて（隅の角度は151°）B区中央部まで12.1m延び、そこで東に10°折れて（隅の角度は170°）露頭部分北端まで14.6m延びており、総延長42.2mを測る。C区内ではっきりとした隅角部を確認したが、他では2か所でわずかに屈曲する程度の曲がりか築かれていたのみで、また、隅角部から露頭石垣までは上り坂となっており、地形に合わせて築かれた墨線という印象を受ける。

積み石は、C区では2～3段積みで高さ2m弱（最も高いところ）の残存が確認されたが、B区では1か所だけ2段残っていたが、他は1段のみで、しかも所々石が抜け落ちていた。C区の最も南側では、横幅1.6～1.9mの石（1.6mを測った石は、片側が調査区外へ続くため、それより大きい石であ

る)が3個並んでいるが、そこから奥(北側のB区まで)では長さ1.5m以下となり、このような大きさの石はみられない。

B区で石垣際を1か所断ち割ったが、そこでは、岩盤上に石を積んで石垣が築かれている状況が確認できた。石垣の手前には広くて幅約1mの平坦面が作られ、そこから斜面となって下がり、曲輪の平坦面へ至る。C区では、石垣際の平坦面を作るために積まれた土の表面付近には、礫はほとんど含まれていないが、一段下りた曲輪面では、礫が多く含まれた土がみられた。B区では、石垣際の平坦面や石垣際から一段下がった曲輪面においても礫が主体となる土を積んで造成されている。

B区の曲輪の造成では、礫を主とする土層を積んで面が形成されていたが、礫が積まれた部分の山側の斜面はカットされた状況が確認できた。このため、礫が積まれたのが一時であるのか、あるいは、カットされた斜面が法面となっていた時期があり、後に礫が積まれて曲輪が造成されたのか疑問である。

D区

主郭西側の一段下に配置された曲輪002において、建物の痕跡の有無を確認するために設定した調査区である。

表土下5cm内外で曲輪面に至り、現在園路となっていて削れたところを除けば水平な面である。試掘第6トレンチの調査により、本曲輪は様々な土や礫を積んで造成されていることを明らかにした。面の表面は主に粒状の白色礫が混入する橙色土が積まれているが、その表面の土が削れたためか、所々で造成土に含まれる礫を主体とした層が顔を出す部分がある。調査区北西部において、礎石とも考えられる表面が平坦な石(約30cm大)を2か所で確認したが、他に遺構は確認できなかった。